

論壇

特集 阪神大震災3年目へ — 再建を求めて

阪神大震災の被災者が暮らす神戸市西区の仮設住宅を毎週土曜日を訪ねるボランティア活動を始めて八カ月になる。住んでいる方たちにお話をうかがうのが主な活動だ。暖房器具がなくて困っている」といった悩みを聞くと、周りに提供を呼びかけたりもする。

この季節、鉄板やベニヤ板一枚で戸外と仕切られるだけの屋内は、流しが凍るほど寒い。口口で話していると、足の感覚がなくなるほどかじかんでくる。すき間風が入ってくるのを少しでも減らそうと、畳の間に新聞紙を詰めている家庭も多い。

ある父親は「震災直後に避難した小学校のプールの水を飲んだ。きたないと言っておれなかった」と、涙を流しながら話してくれた。私の父と同じ年ごろの男性は「以前、住んでいた所に帰りたいので、なじみのふる屋に通っている」と訴えた。

自宅を再建した人々や公営住宅に入居した人々が去り、仮設住宅にいま残っているのは病人や高齢者が多い。夫を長崎の原爆で失った独り暮らしの女性や「家の中だけでも話し相手がいないう」とこぼす。「公営住宅の家賃が払えないから、ここにずっと住むしかない」と、あるおばあさんは嘆いた。仮設入居後、寂しくてアルコール依存症になったと打ち明けた男性もいる。とるすることもできない状況に追い詰められた人たちに疲労の色は濃い。「いっそ死んでしまいたい」という愚痴(ぐち)を何度聞いたことだろう。

訪問する一週間前に「何でも書いてください」と記したチラシを各戸に配るが、「書いたって仕方がない」と白紙のままがほとんどだ。被災地は声を



加藤 純子 (かとう じゅんこ)

上げられないくらい状況までできてい。そんな仮設住宅で震災から三度目の冬を越す家庭が、まだ四万戸近くもあるのだ。

日本の政府は国民の命を本当に大切に思っているのか、私はわからない。私に思っている。明日が見えない人々に、政治は何をしたのだろうか。何もしてこないどころか、踏みつける方向へ走っているのではないか、という風

仮設訪問が教える政治の貧困

いざ噴き出してやる。でも、私は悲観的ではない。国は始めから完璧(かんぺき)なものではない。何か起きたら政治は「さっさと」くわいしく提案してこないだろう。だから、国民が「100」求めれば、何か一つが動くはずだ。昔から一つの国とは、このように変化してきたと思うし、そう考えると私たちはいま、日本政府が国民の命を守る方向が否かの回答を見極める役割をしているだろう。

京都に住む私は震災後も平穩な学生生活を送っていた。政治や行政に関心がなく、不満さを持っていなかった。仮設住宅訪問活動に参加したきっかけは、被災地を外から見ただけでなく、被災地の人々とのつながりがほしいと思ったことだった。

それが実際の活動に参加して、政治に対する自分の考えがどんなにも変わるものなのかと驚いている。例えば、被災者の皆さんが求める「個人補償」。活動に参加するまで私は「自然災害で個人に補償すべきではない」という、政府と同じ考え方だった。いまは、明日が見いだせない人々の生活再建のため個人補償は当然だと思ひ、署名集めなどを手伝っている。一人の市民が政

治や行政に関心をもち、行動するのは、何か問題にぶつかったときでしかない」と、最近つくづく思う。

震災後、次々明らかになってきた「政治の貧しさ」を「さっさと」埋めたいために私は声をあげている。仮設住宅で見聞きし、感じたことを書き止める発信するのは、多くのやるせない涙を見てきた私たちボランティアの責務だと考えている。

仮設生活での出来事を詠んだ短歌を手紙に書いてくるある母親は「あなだに子どもができたから見せな。私の孫のようなものだから」と私に言ってくれる。「ずっと人のために涙を流す人でいてほしい」と励ましてくれたある父親も、私を自分の娘として気にかけてくれる。ボランティア活動は、このお母さんやお父さんたちのために出来るささやかなこととにも、新しい自分を発見するといふ大きな贈り物くれた。

一年前には、こんな自分を想像すらできなかった。

震災はいまも進行中である。個人補償が実現するまで、私は週末ボランティアを続けるつもりだ。

(同志社女子大三回生)